

## No.4 覚えてらっしゃいよ！

先程から三人のヤブ医者が新橋の茶屋で呑んでいる。なかなかやって来ない柳橋芸者に待ちくたびれて三人とも大層不機嫌だ。

男共の堪忍袋の緒が切れそうになった頃になってようやくお駒はやって来た。三人の頭からは蒸気がさかんに吹き出している。

三人のうち頭目格の沼田が真っ先に怒鳴り始めた。

「いつまで待たせんだ、ええー？ 気の利いた人間なんざあ年をとっちゃまわあ！」

お駒は、怒っている沼田には一瞥をくれただけで、塚山の前にトンと座って、塚山のお膳の上の徳利を取り上げると、

「はい、ツーさん、一杯いかが？」と言って右手で塚山のおチョコにお酒を注ぐ。真っ先にお酌をしてもらった塚山、

「おう、やっぱりお駒は沼田じゃなくて俺に気があんだ！？！」とすっかりいい気分になってしまった。

お駒は塚山にお酌をしながら、

「そんな大きな声を出して、覚えてらっしゃいよ！」と沼田の方に流し目をやる。沼田は彼女の目つきを見て、

「この女、俺より先に塚山なんぞに酌をして怪しからん奴だが、あの目つきを見ればやっぱり塚山じゃなくて俺にまんざらでもないんだな！」

三人目の前川は置いてきぼりにあったかというところではない。「覚えてらっしゃい！」と言いながら、お駒はもう一本余っている左手で前川の膝を強くつねったのである。前川は、

「お駒の奴、沼田や塚山がうるせえもんだからあいつらの機嫌をとっちゃいるが、本当は俺に気があんだ。俺の膝をこんなに強くつねったのが何よりの証拠だ。」と密かに合点した。

こうして、瞬く間に3人ともすっかり機嫌を直したのであった。

